風俗文選犬註解　壹

紫谷藏書之印

風俗文選犬註解巻之壹

江都　蓮雪菴牛心門人　蓮日仏我著

紫門の辭

芭蕉翁

送帰ニ許六之故郷一餞別之文也

去年の秋かりそめに西をあゆませ給ひ別を惜む其別よのうみをひとり単扁をしいて宗論をなす

元禄六年五月なかの日くゝ六日のころ旅立人とゝもつれかたらひあるゝ例の沿部無を使ふして後の旅を我と本号孫をなして去一文字なる五光井を志ひ度根の諸士なるゆく對西せんゆを常くゝ那ふ物ゝ人ゝ沿海する多なりとこゝまやうに成しをたなるさゝ画賛の類をも捨りる程雖別の情淺うしたゝ發ゆるゝと移んこゝろよもゝめかさゝして朝ゝを除てゝるゝゝなるものけをよまゝれうゝ兵杉風ゝ者餞別あり

其朝

本多侯と在て旧里より海を人々森川氏許六といふ人々風雅を情あ
る人なりしかるに人を分け草鞋を足をいるあ礒豆を毒霜をいとふて
己が心をやめて物の実を去るをよろこび今住官相やけの為ハ長
剣を腰にたゞみ紫かけのところを鎗をもて世歩いる蛮の是を雨蔵
のもすそハ風に吹るゝしるあさゆ人のむ者ゝらあるゝ

推の花敲ころるる仙よ春の旅　義

ゝきゝ人の旅ゝる習ひ　春の蝶　、

餞別

笠掛るやゝ書ゝるあやめ艸　牧風
象潟ゝ海ゝさゝる青田ゝ　祝藤
本を流しゝ　ゝすゝ　百里
扇のなきをみかとつけを旅寿印　支波
京草よあるゝ人ゝきむ笠乃者　孟遐
ゝ十ゝるゝのけゝきや語話の湖　実石
ゝの海をゝるゝ甲斐のいちゝ時　陳田

富士濃ゝ中ゝかけは　節ゝ　隆部
いゝ南ゝ　ゝ寿の形見やゝの月　日鮮
文山の形ゝいすゝ別　の那　遠化

餞　許六

枇杷の大ゝの扇の風を生の松ゝよゝれゝんゝの賜別ゝ
おゝゝ今ゝ何ゝゝゝんとゝあゝれの狂ゝ　其角

別ゝやゝ扇の海ゝとゝむ

主人既賞のゝゝをゝめゝ一日ゝ面一ゝゝ流行ゝ時ゝ
本ゝ侯ゝとゝやゝしゝき味ゝゝれゝ　、

文選十六　別賦　江文通

黯然銷魂者唯別而已矣　同樊子桃李一分不忍別

かゝゝめハ一入の色の浅きなゝ　旅立人ゝ物を送ゝゝゝむけゝゝ
古書ゝハゝの鼻ひけゝゝ旅立人ゝ酒肴をゝめゝ旅人の去ゝゝの
ひを雨て其旅人の行ゝき方ゝゝの鼻をゝむけゝゝゝの心ゝゝの鼻む
けゝゝ火ゝ袋幣帛を送ゝゝ古歌ゝゝ

後撰集　みちのくへまかりける人に火打袋をつかはしける
をりくはむことくの火のうちもあらは心さへうきとものへいふ　みつね
八雲御抄に小刀さしたるといふ為家の説にさしたるハ腰刀なり火打につくる
ものなりとの今の世にもものきる小刀をさしたりといふなり
親忠集　親盛唐物の使にいくに金の火打に火嚢に沈をして緒をすけたる袋に
打つけにおもひ出つやと古里の君のふ草しるすしるせるなりけり
公忠集に田舎へまかる人のもとへ白き袋に青き物して火打を入てやるとて
打見ては思ひ出よと吾なこの?のふ草しるすしるせるなりけり
昔の書紀ハ式に美濃国恵奈郡恵奈の神社坂本の神社あり昔ハ
駅の名に此駅より東の御坂をこゆる今恵奈か嶽といふ大きなる山也
此駅より御坂をこえて信濃国伊奈郡阿智の駅にいたりしこといはゆる
京伏せ家はきてなとハ此坂を越て阿智の駅にいたる道也のちに木曽
路開けてなるを此御坂をかよひしをいつのかとよりか此道たえて
たはら木曽路をかよふ事となれり東の方にハ倉科保科?科仁科蓼科
なと云てふ地名多し一説にあるといふ本ありちかへにいはゆる?

なりけりき卑は布を煮つくるなるへし其皮を取りたるハ布に織りて
とよそなる又此木の皮をはきて土佐につくる衣裳にすへし織るにせしを
信濃国に生るハ緒に白く作りたるハ名産になりし之神楽歌に　木綿
つくる科の木と見えたり今級布萎布多布などいへるなり
土佐日記に　ひとのつくるのをみむけすとて
其器画を好し風雅を思ふてならはよとあり絵も何の為好むや
風雅の為好むといへり風雅も何の為そ是れや画のこゝろを思ひ其学ぶなり
?して用をなすなり一なり織や君子も多能を恥といへれハ品こゝろを
用ゐてなるの感じのなるまし画をもつて其の師とし風雅をもちいてなるの家
となれバさる師の画も精神微に入筆端妙をえてふ其幽遠なる所
なるべき事にあるれよ風雅を友とし妙なるの如くならずさえひて見るへし
精神微に入筆端妙をふへし　荘子曰　筆端鼓舞筆端微妙
鼓之舞之以盡神　筆端と筆のまとふ所の意なり筆頭とも
つかへ同し　韓子外傳に君子宜避三端　文士筆端武士鋒端辯士舌端
十列詠物篁記　仰之の月仰之の霧同姦水老女の假粧女の

醉る胡代の老る法師の辭食無而神楽動使るるを聽るる八仙の画
只紙阿西行の言葉のこかりるあるいはるるを
あるれるる度をの〜後を和上皇のかきをひしるのるるるる歌る
皇太后宮大夫俊成五条三位と号す安元二年九月十八日
出家法名釋阿元久元年九月晦日薨九十一歳
俊成九十賀記　源家長

八条三位の入道は九十歳の齢をすぐしたる人のなる世を
後るるるるるとあるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
けるまるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
浮花山の僧正を仁壽殿のめいるるるるるるるるるるるるる
一きう御せるるる霜月の廿日あるる言と走るるを中書和歌所のかるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるる皆表る上人るる東寺入道中納言定家卿るるる

助けるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
はるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
安元二年るる九月廿日はるる心地例るるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
潤息つるるるるるるるる皇太后宮大夫俊成るる歌
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

かへし　大將

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
四位殿歌るを伊勢の内宮の歌合るるるるるるるるるるるる
の歌合るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
つけて侍るるに長るるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
するるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

かれ行る狂上人さ[illegible]の歌をよみるに
おもふこは花のもとにぬれぬれ死人甚きこゝろきの[illegible]
かくよみくしをおくくしのひとつねに二月十五日の夜より
[illegible]あり[illegible]のかくかはるかさつけ[illegible]　後鳥
那ひ[illegible]のこゝろをつくしたちすの上なたいさんん
西行法師の[illegible]かまくらの賦又西行の贊[illegible]くのもこゝろ
後鳥羽院　高倉帝　第四皇子　諱尊成
後鳥羽院の傳[illegible]　後頼のちの新阿西行後恵あり新阿
はやさしくえんよりも綜くあり[illegible]あるあきはよ墨衣する
姿なり西行おのゝ[illegible]志[illegible]あり[illegible]あるあるくお[illegible]
かくさ方をよるよ[illegible]兼て[illegible]西生の歌くあ[illegible]
[illegible]けのくまはひすてすくき歌よあれ不可説の上なん[illegible]
[illegible]は[illegible]言葉をかよ[illegible]長細お一筋をゆどりなるるれ特なんの
跡をもとめひなんのもとめるあをとりあよ南山大師の[illegible]
[illegible]雅をみをよ[illegible]ひて紅をかけを栄門のかよ送を別[illegible]

南山大師　白氏文集　四十一

波離滅有南山大師得之南山滅有景雲大師得之
元享釈書弘法大師の[illegible]を[illegible]に南山数傳而とあり
撰集抄に高野大師の[illegible]調よまれる遠廣まれはさめさるよおのつ
事といて誠[illegible]やもうあくはかくしん人よ法て常を世[illegible]
作[illegible]のるは我心をるはんとよはあの[illegible]世人とすもを常を時る
外我に南山大師は自民業又出る祖師をいふ又[illegible]大師とつ[illegible]平
記[illegible]吉野[illegible]辺の[illegible]あをいふ南山[illegible]南方をいふ元享
釈書よりは[illegible]大師の[illegible]とすくく[illegible]後法人考て補ひ[illegible]

許六の[illegible]ようやて[illegible]ひくくるるやつ[illegible]
年のよのきるひや　人を　指り教　李由
かてしのみのよるきるひや　おくの義　許六
作のよのよるきるひや　おくの義　許六

許六は彦根井伊家にて三百石の侍之氏時江府勤番と鈴町喰
遠江門内に中屋敷よりは元えいるあのるをみむけるう

此比良坂に許六か部屋ありある時此さしきにて

秋の夜寂か亭こそ中はしら　翁

此比良坂の中柱元禄のむかしより水なかしの災あまた有て今にあり其の
年太守の命として其中柱をぬきとり御城元彦根の御城へ入られ侍れは
さる名物をとりて大の災ひありてハとて此年玉へめされ其跡へ又柱を補ひ
今に此比良坂甚また蕉柱とかける額を甚はしらへかけられてその
跡傳はりて誠にめてたき此部屋にてある八十年余絶ゑぬの跡ひのうし
分我か柴門辞を文選の巻頭に許六子か書ける誠に明眼至妙
といひつへし いにしへなれハ文政の内外古人の跡をもとめ古人乃
求めし所をもとめよと南山大師の筆の道にも見えたりとこゝらへ今も
筆力古今にすくれて教道の専要芭蕉翁の老婆心にて後世に及
ふとしへなりと許六子か具したる眼力識に仰き尊むへき文章也 祖翁
の誹風後世に流行せしも此道に於る者年〻歳〻に増りて流行頻(シキリ)
にいつれの時も一時流行の洒落に流れて道の本意を失ふ
事多かるへしきりすゝ歎ずる此章を以てとらへ心つくへからん

るへき万人に一人心つく人ありて古人の跡をもとめ古人のもとめたる
処をもとむるにいたりてハ我か本意なりとの文章也
古人の文章又ハ發句に先達詮釈をかふむらすは

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

平家物語旧都月見のところ
徳大寺左大将実定の御ありさまさなからハ惣門ハ鎖のさゝれて

梅白しきのふや鶴を盗まれし　翁

白氏文集 二十
句留醉客夜徘徊 偸(ヌスミモテユク)將虚白堂前鶴 失(ウシナヒキタル)却樟亭驛後梅

よしのにて

山さくら瓦ふくものまつふたつ　翁

李白集 山家紀
春よりある所に尾花ける事二ツ三ツ出て二首をハ詩に為らひて
ましさと我あすてを称するなり、

同東の道の記　　さくけるさるの歩かくりてさ孝に往まくの人

以心傳心無一物

古池や　蛙とむ水のおと　、

かくの如く詩和歌物語の類に出て幾百を尺あらむ古人心あて注釈は
なほ其心を行くの發句は行くの證歌證句を以當初心をさとる其句
を解するつまるに其源よさらのみりて古人の跡をたづね心をつけへ
同安人祖翁のくいつよ面けるを古人のかとあるる
あよ面見てを句をつらつまるを宗鑑貞徳の風を一変すて天下独歩
の一風蕉風と立るより翁を百家衆氏よりて博学多識(タクサキ)よまりく草
傳直示を悟人て其作意を尤るに

五老井先生家譜

宇多天皇九代孫佐々木源三秀義六世堀部四郎宗綱十代目堀部與郎氏秀長子
森川金右衛門陳氏後其姓江刈野別森河原住人永禄十年始
德川家隨身　　大神君御撰之勇士就十人之隨一也
森川八左衛門氏重初名銀之助氏後三郎　御供本奉仕賜八百石

同與治左門厨重親初名銀太郎寛永元甲子年
井伊正四位上掃部頭直孝被召出紀行就百石
同與治左門俊令又重宗天和二年百石加恩宝藏院流鎌十文字鎗之名人
同五分百仲　初金平又兵助　領三百石
正德五乙未八月廿六日卒法名五老井無無道無居士菊阿佛
森川氏之子孫今井伊侯家中と連綿タリ

猿蓑

花と咲る多らら西念ら　長著く　　有

あるの酸　蓑ら　春らられて　　元郎

分我と酸蓑の二字よみ分かくよ身てすくきと世上よみ其ら心すく
きといふものいふる物ると知るるく人ら本百家ま蓑て蓑濃の如き物
にて香の物よ用ふ是蓑と云是蓑と云ふ分我先ら年本
号俗を二字旅行せら其ら名く酸蓑くと号ふ俗て本百人ら号に一人を
さるものいなといふきなる山ら百てある富商の家よ入て酸蓑のるるを
つ移俗元其家ら老母あり和歌を好てすとふる風雅の老婆此老
婆らすきといるるの八郎俗ら名ら名いふ其すらと

いつる物とあるべしとぞ思ひたる梅の実よりは酸くして甘みあり香味を第とす酸きを梅酸よ漬てなくなるとて加ふる小梅の種を色を青梅の如く梅のごとくなるべし
はかくるみは縄をこまかにしていちぶくの実の如く落るなるべしとすのりあるこの間より
花咲き実を中を去のき春三月よりくるを実をむすぶといふ花本草山茶谷まく
日あるうるく雪消るの清泉の地よりあるべきなれば生せれば本草まるる衆人ふるく
さふ寒あの者よりあるべしいとのるるかるべし谷ゆまと雪消へさる間さうあるべ
雪消へとつれは諸草の芽みそ初るるるの故病めまい気のあるさうを実き其外の紙
を一本草に色月よりくれは醤油のるるるるるるるれはしすのう
をのるるるなる三月の末実をむすぶる酢 酢草は車ちくれてよるるるる
あるすのうは其のるるる実をむすぶる夢草なるとうる花をいるるるるるる
のるは花を咲とのるるるひて雪中巡谷のるるれは紙かるとるるるるる実を
結みるるるるの草の実を酢草るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
のるるは実のるるるするるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
其るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
後のるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

飄ノ辞

男鹿なく山里と詠しる嵯峨野なく方よかれる人ありまるつ元の源を溜る
るり蓼の系圖哉しる甲斐の飄も人は業力一丁の分学をあり滅する飄
飄草を植をあるるの第次もやや中るるるる物を書分伝る
甲るなるて果るるるる色ぶ学をとは人伝伝と分を雲水のるり
なるき浪人ひぐるともおるるかの江る草刈るおのとあるまり山甲のるるるる
るるるかるとるるるる かまるるるるるるるるるるるるるるるる

源平盛衰記 仲正嵯峨野小智を学るるる
玉京の業平をるる其山里と都人嵯峨野あるるの秋のるる
さるるはあるるるとおるるるけん

拾遺集 山江る萩るるおるる縄をなみ移るや移るるるるけるるる

系圖 文選 為系紀之意 系は乱也

あるるるつけて酒巻るあるるて一飄のるるるるるるる
草刈の中るる其賢人くくくるるは許由るかるるるとるるる
あるるいよくるる勝る為てかるる名物もるるる海苔る田植の黄系を人る種物の

納め度とおぼへけることはにやされ花にあつしき身をすてて揚名をうちこそ
しより源氏の夢の名となり歌人の賜ふまでひそかに夕顔そうし

つれづれ草 もろこしに許由といひつる人はさらに身にたくはへもなくて水
をも手してささげてのみけるを見てなりひさごといふものを人のえさせたりけ
ればある時木の枝にかけたりけるが風に吹かれて鳴りけるをかしがましとて捨つ

古今著聞集 曉行法師の夕へまかりけるに荒きよりひさごつらつらなりて水のみ
けれは ゆふべのかさもと人やおもふらん水のみするは瓢なりけり

懸瓢 今人所謂茶酒瓢是也 蒲盧 今之薬壺蘆是
也 壺瓢之屬既可烹晒 又可為器 大者可為甕盎
小者可為酒樽 為要舟 可以浮水 為笙 可以奏楽
河汾之寶 有曲沃懸瓢 又瓠也 中流失船 一壺千金 是
也

五元集
合甆 多四升 瓦瓶中破 各一也
舟の声 許由がひさこまさに青し 其角
夕顔や 露を宿しける 花の形 其来

異端ハ非聖人之道而別為一端 如揚墨是也

源氏夕顔の巻 かのしろくさけるをなん夕顔と申侍る花の名は人めき
てかうあやしき垣根になん咲侍りける

同抄 花鳥 夫つのおかりのりいふにきかせたまへる垣根の夕顔の白
つれづれ草 六月の比あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり

新撰六帖に源氏物語揚名のことを忠守朝臣にたづね侍りける時 藤原雅朝朝臣
伝へきくむかしもいまも夕顔の宿のあるじの名をばとかれし
丹波守忠守朝臣かへし
心あてにそれかとぞ伝へきて名にしおはぬ夕かほのやどを
揚名の二字 諸国の介に限るべきにはあらず只名目といふ意なり
夕へにも其名のなりけるを職掌もなく給ふもなきをいへり

扨夕顔の王楼金殿にさらざる由緒をとはば喰物乏しき五条あたり
りに徘徊して貧しき神の神事に是なるべし隠士が白汝宇治の物語
をとりてよく思ふ拾遺の瓢を乞ひきさ隣人が一命をたくはへる全く
瓢の器といへむかかる因もなくひさごに何のへだてかあらん
宇治拾遺物語なるにつき

今は昔京にあまる女あり幼くしるの折りつくの春中にて腰おれてなやみ
ける武蔵かあひくてすくをとて桶よへの者人をとらせて銅を乳八海を共婆の弁丽
ふてをかくりうのちハ老まあのなりて死あるさりれハ今ハ夜の心を仮せ殺やう
婆のひりを八者よいあるをうえ未よるえといやて人する等ハ等の極水日半して弁表
て付のかるりれハ胴くる者の者をよやとて生てれハ胴者をて彼婆の頭を
ちんやうつ物を取しとをとりてれハひさこの家人を宝ものめくたつ人を
人をかりりり極くをてをんとて種つれハ殺りたひをてひさこあまを生り中男一ツ
おりて以とかれかをけ二人のをり取用ふれハ踊りの又十をるみりて取をつれ
婆りおくみ業りをけるを儒よありるを安らを等りをりて弁の賜おくを
を兄弟て胴ちんと心かけりれ孫ひよるを者をたりみて弁の考あつまり
をを弟を二石をおりるれをよ孫ひ一ツの弁よお安てきへ付ておかるを業色
して極をて胴おりるのちよいるて殺りり弁心さをらめくなりんあ
十日半みて其弁をみてひさこのをを取りをりくをてを
れをつるををひをてをるひさこ七ツ八ツ生をり中男一ツ切て人をを
くいせ胴をくをひれハ苦きをりをんやをりをを以為をるをりを

うも口あけを取苦をてちんを沙をくを幼を二三十日迄を今ををを付
まりりをんをを孫のはめ婆をよりあつを桶よををよと宋の人物を用
意をりをくをくをれをくおをひをを切を宋ををりをんをりれハ宋をを
くをあぶをあげをちををちんをいふ毒の色ををををくを出を目鼻を身を
毒身を七ツ八ツのををををり出をる毒焼をいをを孫ををりををを
おりをををををををを焼をつををををををををををををををををををを
貪乏神　ありを者を生る貪乏の人あり中をを者を借銭の測
る流を流を船ををを銭多のりをををををををををををををををを
をあちををををををを人をを孫釜を五銭泥棒のりのををあをを入を
他ををををを身をを人をを孫釜を五銭泥棒のりのををあをを入を
婆りをををを出ん者の者ずををををををををををををををををを
十八七をる大意鍛冶を赤越のやをを者ををををを男色
にて草鞋をつを者をを者を誰をを四をを仲の
意者をを曰ををををををに者をを貪乏神なを琴しのをを束
のををををを人を我を供仕をなを其用意をををを

ともしからさめて過去のやくそくにあたる貧なりと合点
しを甚信じ任禅師のまかうなり

万葉集五 貧窮問答歌 并短歌

かせまじり雨のふる夜の雨まじり雪のふる夜ハすべもなくさむくしあれは
かたしほをとりつゝしろひ糟湯酒うちすゝろひてしはぶかひ鼻びしびしに
しかとあらぬ髭かきなでゝあれをおきて人はあらじとほころへどさむし
くあれハあさぶすまひきかゞふりぬのかたきぬありのことごときそへどもさむ
きよすらをわれよりもまづしき人の父母ハうゑさむゆらん妻子どもハこひて
なくらん此時ハいかにしつゝかながよハわたる あめつちハひろしといへど我ためハせまく
やなりぬる日月ハあかしといへどあがためハてりやたまはぬ人皆か我のみや
しかる わくらばに人とハあるを人なみにあれもなれるを綿もなき布肩
衣のみるのごとわゝけさがれるかゞふのみかたにうちかけ妻子どもハあ
とへかこみゐてうれへさまよひかまどにハけぶりふきたてずこし
きにハくものすかきて飯かしぐことわすれてぬえどりののどよひ
をるにいとのきてみじかき物のはしきると云へるが如くしもと

とるさとをさのこゑハねやとまできたちよばひぬかくばかりすべなきもの
か よのなかのみち

世の中をうしとやさしとおもへどもとびたちかねつとりにしあらねバ

かの俳諧深き坂に空也上人まで推みくらし鉢たゝきの祖師とハなりける
かのさゞ波や堅田の海士の海老すくひも俳諧の内にとそいひける隠士大き
に腹立て海老すくひ分際なし理屈の論なり看て風雅をしらぬ人生お
一瓢の楽しみの後の人よりハ贈りといつり草刈の去見くらしみといつく上戸
の情なり瓢のかたちをいはん腹伸と肥ふとりて口のせまきハ何ぞやせまくて
餅のつまるハ下戸のなすけきなりと大笑してつまる滄浪の水すめらハ
つけて語一濁らハ鯰を押さへよといひて笑ひものいてん

空也上人の侍に鉢叩の詩あり堅田の海老といへるハ翁の句のうち
入なり 海老ならば小海老すくはるゝ 海老に俳諧をといへるハ
蜆るをいへるん 翁の後の会に 山谷詩 費金萬籝常作災
滄浪之水清兮可以濯吾纓 ことちあるもの又をも用ゆる
遂去不復與言

倭名抄に辞世　世の中を辞して世を捨てること

瓢のちなみ　瓢　李白集

我はひさごの樹あり姿のごとく毒を仙て世捨人の見るに八ヶ壮周の瓢なり

らくて蛇尾の者をとるに法師玄治つて毒を生する毒海則ち法

かれを題せるものの多し既に伊と賀一元仲るひてて毒をとるらくい

多く底に垢をそなき重きるとるとつる実に憶寄ちるむ一

いってのひちをけるの亀の尾のき世に引ぬるる清さに

春風のひをすむる者とあるとに秋ひをとるける時に

法師玄治医を以て毒を仕ふ一町けんや店ら法師ひ仮ひ一ものとも

異称日本傳に瓢公本傳人也初以瓢渡海而来故号

ひさこらと瓢の名なりしに水をくむ笠につくるまろ長笠の者なるなり

て水をくつるる杓をもひさこといふ瓢をなりひさこといふ

水をくむ笠の者に出て瓢をいふ甚古来紀うに今の世に志やと

いふらひさとの部なり

ある書に摂南今宮村に住古此厨子所日ゝ供ゆの料の魚を調進す今

も正月十日に八上内所執柄家へ鯛を献上す両人大紋を著し村長

さ一人ふ毛紙園寺の付きをん大宮の内興を今宮より加興丁をつくむるさ

ものハ後冷泉院の所時ちまる又元孫延宝の比やこの教ひいふひやこんを

出ちう帯蓋ちらさる西ものやみのあくまくくに益あるものとて帯佩

ちて珠脱す今ちひやこんをつくるにやこの教ひいふ者にちる人す

夫木集　夕顔の実さへむすきたるなきさてさて世のもちるれ

五月ちに

夕顔やふくるやまあるに居うれ　万子

夕ちむのさけるに　遠き使ふ和　遊子

夕ちよふくるの者さくなつるに

酒香千いひまけあり　生りひさこ　夫考

夕顔の花見の花や　油賣　許六

雷と一ちに義るふくるこの部

夕代のふらりちるふるるこの部

針立ち　拝くているふるるに

周信の瓢の盃ナ

ちゝ[illegible]ゝ一杯入のあるみこゝ　其角

、

ある人たゞる瓢を二つに切て盃とし外を地さびの
き内に朱をかけて口に村雨をかけて白とのそむ

清水瓢　李白の西ナ　かゝちり　其角

かゝち目鼻なきめんのやうなり

ふくべふみ　ゝる人とあり　、

山素堂

瓢之銘

一瓢、重黛山　自嘆稱箕山　莫賢首陽餓　這中飯顆山

顔回のかゝ身なるかゝみ　惠子のつゝ種なるあゝで

我は一つのひさこあり是を[illegible]みよつけて花入る笠とせんとすれハ大

うてのりあゝ[illegible]さえつゝて酒をうんとすれハかちてゝる

ふうゝあゝ人の白草庵のいゝき糧入つきのなると倣ふ心ある

うゝやゝて用て隱士素[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]む其[illegible]

右は記す其日旨山をうゝておくらゝゝう坂上四山ゝゝふ中ゝる飯顆ゝふゝ

老杜の行る地ゝて李白ゝ白ゝゝれのゝあゝ素[illegible]ゝかゝて紙

ゝ貪を清くせんゝゝ且むゝき時ゝ廉の笠とゝなゝゆる時ゝ一壺

もゝゝ今をいゝき[illegible]ゝとせんゝゝゝゝ

物ひゝゝ　瓢ゝかゝき　我世ぐゝ　芭蕉

室町殿日記ゝ切德水を瓢簞ゝ入なゝあゝ[illegible]ゝ一簞食一瓢飲

ゝゝ出ゝる文字ゝゝて唐土ゝ瓢簞ゝつけゝゝ瓢ゝくゝく種類ゝ其水

ゝ清ゝゝゝ池の水くゝまゝたゝゝ[illegible]ゝ瓢ゝ瓢ゝゝ和名ふくべゝの

ゝゝゝの越氏の水くゝて大ゝるものを瓢とゝゝ[illegible]ゝ細腰のものを藥

壺壺ゝゝ作ゝゝ[illegible]ゝ瓢ゝ作ゝ[illegible]ゝ短柄あゝるものを壺ゝいゝ

瓠のかゝらゝゝゝゝで柄のゝきゝのを懸瓢ゝゝ本草ゝ苦瓠ゝゝ語

ゝ苦瓢ゝゝゝ其味膽の如ゝ詩ゝ苦葉ゝいゝ物是なゝ和名にゝふくべ

瓢ハヒサゴ　簞ハタケノカコ　瓢ハ自ら別のものなゝ

夫曲集　貧ゝの神もなこむや借錢ハりゝゝゝゝゝゝの海日掃ひに

示ス二秋之坊一辞　　支考

ある秋の坊や秋の字の秋の世の秋の文に秋の坊なるを見れハいとさひしく
みなつかしく好む人の心にありて誰も一物もなきものぞ昔湖南の幻住庵に一夜の
夢をむすびし其折の志を忘れずして常に迅速の一句を
あたへて先師の葬送におくれしが今此草庵を回し心なき縁なくる
法師乃れ住て待るが物いはぬ日の渡り日も待りてかく住なるこそあやしく
翁とけ給ひてあまりて何某が三十日といふ歌よみけるやあらんと
このくにも笑ひけるほどの秋の坊が曰俳諧とさるるものならんが曰定むかしの俳
諧よくいふらんとせハ世情に落て心の花をうつろひぬつし花なきハ又世乃
風流なりとせしくするすみなりんこそ法師達におきてハさるなかれしく
俳諧なしてあらふて風雅なるまじふべくんば志なくていふらんとせハ東花
坊が如き世情にうき名とりてん風雅のるさへ識に志るのかなしからんや
成るの三月なるとき也　虚切記

ある時秋の坊湖南の幻住庵を訪ける折
我が庵ハ坂のちいさきを洗足の草　翁

かつて一夜二夜の仮屋りには翁に常迅速の
句を書して今ハ追見おくられける
やがて死ぬけしきハ見えず蝉の声　翁

世をかくくするすみなりんこそ

白氏文集　匹スルスミノ如シ身ノ後有二何事一応而人間無所求

秋の坊が行脚す
とく起て茶なりのちへ行すなれ　李東
小桜とまろひす名残るすまひ外　秋の坊
月と田つく波やりそふるあそこうか　、
凍つけハ凍つきながら笹の風　、
山あらしまたよきあつて明ほのし　、

正月四日　辞世
正月四日よろぼは此世をさるなは　、

正月四日李東がもとへ訪ひまゐて拾ひあつく我が庵つくりとて
此句ちから　すゝみさしつかうて思ふくらむ

秋の坊う市毋追悼

あのりきるを見ちるや焼さるる　牧童
卯の花ら誰ぶ素しも志ちひしり　秋う坊

三衣一鉢
百ふるうらく宗とたふとて

生ふ死ハ心うるを見ア人をこひき
百るか
生ふ死ハ心のうるを見ア人をそやル
とて生ふを知ア百ふ人をこひき

秋の坊

讀法花經

其時よりちち牛の竜ゆのうけらある夫提婆あぶ
焼時雪よ庚のついらら西ふしなるけるらちまいん
秋う坊う分ふあるうる
稲つむと百ふるうる　うせろう　秋の坊　李東
秋う坊寂ちる

示二僧一古鏡一辞　李由

ふる僧あり古鏡といふ学業よりて東湖の濱よりて産て濃州(ノウシウ)ふ
ちうハなと志津孫六の鍛(きた)を紫電(シデン)白虹(ハクコウ)とし三尺の光を振ハ
るや天下誰ありて敬する者あらんさるハむかしの剱今の業刀とおなじく俊成卿
の花の鏡もおなじく今ハ宋村の蒔絵の花のたやしるしるあれ
弥ふの鐘鑄の奉加通昊よきハかりきるふるくるとみし
年を経て花のかゝみとなる水ちかるをやるるとらるん
さる物ふ知えむは尊の寺のかゝみ花ふるるぬ　亥隆
咲るうる花のかゝみとなるゆるぶ　桜のトやく色のやう水　顕輔
桜かやまうるうるん新きよき玉　行川の花の鏡ア　定家
花トをや盛をてややくあのかゝみのかけを雪と降ん　秋行
名銀治古今銘つゝし　志津三郎兼氏　関孫六
漢高祖三尺の劔をふるふて天下を治とあり
異苑曰晋恵帝元康三年武庫ニ火焼ニ漢高ノ斬白蛇ノ劔一
大風歌　大風起テ今雲飛揚ス

此人かつて詩をよくす多情有声の画を粉の美言芙蓉の再をあやつるとつくと
る粋風雅よ足をそゞぐて委佗の道をさぐり一とせ先師翼の張藻の比

鏡ハ炫見なり
かゞやくことゝいふ義
かゝみハ万境を照して
さらに一物をあらハす

淮南子曰
以鏡視形
曲得其情

まゝくて一棒をうけうと出てくるかいまゝ清雪をむけて参りたる参りて又
鏡を磨くうむよす風雅ゝりとあきらかなるもの鏡の物のかけをうつすう
如此他元来磨くるを去りて速ゝ去つて水銀をうしなふれ

多別ま花の鏡よくうつる
信古鏡傳不知

鏡のちなみよりあるいハ称ち
るゝ鏡ゝ伝ゝるゝあるゝ昔鏡といふものを去ゝ称ゝ鏡のゝつゝといふ
戦後ゝ和の山といふ所ゝ女鏡をゝゝ傳つて世ゝあるひる
るゝ去ゝ去ゝにあるひゝの女鏡をゝゝ傳つて世ゝあるひる
くゝを秘ゝてくるゝゝ多ゝゝ時ゝ鏡ゝ
にゝゝゝ娘又鏡といふものを去ゝゝゝゝハ他鏡をゝゝ已ゝ
かけのゝつゝを我母のゝゝゝなゝゝゝゝゝ住ゝゝゝゝゝ
つゝるゝをハゝゝやゝかゝゝゝゝゝ
箱根集ゝ十八　四月一日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝき年のけゝゝの鏡ゝは　天暦ゝ製

[illegible]

四季のかみ草　春々大根

[illegible]人[illegible]のかみ草　さかえ[illegible]かけを久しよ

[illegible]八[illegible]花

[illegible]水[illegible]かみ草　[illegible]花の色[illegible]

[illegible]　[illegible]顔

朝[illegible]花のかみ草　[illegible]袖[illegible]

[illegible]八松

本朝文鑑　影法師對　橘不周

誰[illegible]何や忽然と[illegible]曰白髮を清めて[illegible]を待[illegible]法師行人なれハ

[illegible]白拂下る素[illegible]我と對して坐するや彼曰白髮を清めて[illegible]を

待[illegible]行人[illegible]ハ我白拂下る素[illegible]と對して坐するや曰[illegible]の[illegible]

七[illegible]迷[illegible]なり[illegible]曰我[illegible]我[illegible]白拂下の[illegible]白拂下といひ

[illegible]や[illegible]彼[illegible]彼[illegible]漢の棠陰比事[illegible]

[illegible]俗の板倉角の捌[illegible]実[illegible]

[illegible]り我又多心をせめて曰一論[illegible]際[illegible]先を[illegible]

[illegible]論を[illegible]曰[illegible]

[illegible]や隙士の境界[illegible]世[illegible]の利[illegible]

[illegible]

五元集　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紫苑自賛

[illegible]

[illegible]人[illegible]東かみのもりるこゝろ　[illegible]

贈新道心辞

丈草

世をのがれて道を求るとの人々皆一かどの志を発して誠きつとめと
ゝ成あるを年を重ねぬれハ又かれらとひとしく俗塵に染る事くな
るべきなるはめの人と物も思ハぬるまゝのミそおぼるる古人とひとし
かるべきを遂へきよしすめるけるもぬ魯九子
ゝみの国埴生の山里よあるひといはるさのむる歌のいとうる俗ゝ
俄に墨の袂の深くそちりのすゝうをかけ出る里よかきとゝふるよ
僧史伝て今の心さしの四ゝよる程のちの出家をおこゝぬゝさ自のか
とを祈ひて拙き詠をヤおゝぬ

切ふとゝ者をゝ み僧るよあゝるゝ乃月

出家乃後の心

花山院ゝ出家の後悔さるるあゝ業花物語よ見えゝ

尊退子詩　與其譽於前　孰若無毀於其後

紫せんせきゝ

一　坊主まる魚をとゝく　一　地獄へ行て鬼よまけるゝ

一　大食をしてくゝせる　一　念佛ゝさゝるゝ極楽とする

一佛法ゝゝをかゝくゝも此歌をえよ

皆人よよくを捨よとすめゝ添をひろふハまの上人

禅林類聚巻三

世尊纔生乃一手指天一手指地同行七歩顧四方云

天上天下唯我獨尊　雲門和尚云我當若見ハ一棒

打殺ゝ與狗子喫　賛圖天下大平

釈尊迦葉佛ニ傳法之唱

法ノ本ハ法法ハ無法　无法ヲ亦法也今附無法時法法何曾

法ナラン　阿含經ニ佛告比丘四大河水入海無復本名同名為海四姓

子於佛出家剃除鬚髮著三法衣无復本姓但云沙門釈子ト

形ゝさゝ地ゝさゝと柳ゝ　魯九

坊ぼゝらのゝろゝ附あゝ　夕あゝ

延よる腸ゝ細ゝ　庵乃声

新宮ゝやゝをゝれゝる系ゝる

焼レ蚊辞　嵐蘭

蚊蚊帳中の蚊を焼に辞をもてす此辞を云時ハ我手に死んとも
うつろふべきとせよ夫汝雉も樊中にやしなはれんを欲んと彼も心
をよる足ハ食をもとめて人の肌にせまる彼を笑せむや足をすくまんや
荘子曰澤雉十歩ニ一啄百歩ニ一飲不レ蘄レ畜ニ乎樊中ニ
汝中の雉も十歩にしてまさに一啄を得百歩にして將に一飲を得る其
飲啄のかたきをいふなりもし籠中にかはれんには則飲啄のものの
やすかるべきも雉の為に望ずとなり
されど草にかくれて草のためにやる蚊も帳に入て帳のためにやる
あはれなる方いつきとらせむや

雉ハ飛事矢の如くするをもて往て地におる故に篇ニ矢を加へたり
雉飛如レ矢一往而墮故ニ字從レ矢

白氏文集
林静蚊未レ生池静蛙不レ鳴景長天気好竟日和且清
春禽餘哢夏木新陰成

蚕ハ蟄し夜ハ出一名白馬暑蝨化ニ生ス于木葉及爛灰中ニ
為ニ子孑虫変レ蚊亀鼈裏レ之螢火蝙蝠食レ之
つれ〴〵草花にある付けとハいへる故にかゝんも此中に楠のつゆ
枝に雉子をつれて君かぬるもとよる花も時しもまぬといへるいせ
ものがたりにえらるつゝ花ぞくるしきぬにや
我さのむ君かぬすとをる花も時しもわかぬあきあはれなる
𧍒促織の中に入ても夜雨をきけハいかなしや雨にぬれ露にをちてさ
そはれし風にまつはしけぬ玉の緒のたえなんとするもかなしく侍りけ
機や積み来し汝も焼けする何を情とせんがための逆旅へもへく
をく須山小宮山も秋討もかぬれて謀をなすほといへるも天下のなすも
しておのつからちからふ又汝といへるむや
袖中抄所明にいつきさせてむかしのなしとハ世話にきかれたハつき
させかぬもひろいんと嗚とそりかぬとはきぬ布のやぶれて何もまへなさを云之
ある書に波多とはまてあるあり一つも機まで皆人の知るなりまた一つも
服の字をかけて布帛のるいの織るせるもの名なり

源平盛衰記に二月七日の曉九郎義経弓の尾を先陳として
一の谷の上ひよどり越に向ひける中宮三浦荒次十郎すく
み出で將しかるを附うさき一ツ立てども多一ツ立てども
兵ども[illegible]とおりつるを兵ども[illegible]
つるうあるべきにこそ一騎まさきかけておとしける
ものとつくるとすると[illegible]
[illegible]の尾よりけ作らる　花乃友　法德

和歌記行　上巻

尾上つき丹波路かよふ乃の鈴代のをさ逢あるとおもふ
りて鐘掛れのそおもすると一の谷内裏後目のるを西其代のみ[illegible]其附の
さあさるのうかひ伴よひて二位の尼君皇子をいさまり女院の
[illegible]あるもの[illegible]舟を形よ[illegible]内侍局女嬬
[illegible]の[illegible]の調[illegible]琴琵琶[illegible]
[illegible]なけ入供[illegible]鎌の[illegible]
[illegible]歳の[illegible]ひ武蔵[illegible]素浪の音[illegible]

一の谷の古戦場を天くるる西るる日を旧鬼哭する声物すさく哀盛り旧
跡を十六の春の花將千歳を徒をそけり
元弘元年九月廿日戊刻陶山小見山板討ひを笠置城放火廿九日没落
鳳輦ハ頼朝を[illegible]日本武尊ハ夷狄をの[illegible]
[illegible]大盗あに樞[illegible]を穿むや[illegible]
[illegible]窟[illegible]
つきて[illegible]と[illegible]る　嗚呼跼蹐の徒[illegible]
鳳輦を[illegible]
[illegible]
[illegible]昊天の[illegible]
[illegible]
輦の妃　姨皇女英の[illegible]
日本武[illegible]
跼ハ魯の盗跖　蹐ハ楚の莊蹐　二人[illegible]

原本 跖ノ字ハタヽトヒカナヲ付タリ 跖セキト改ム

盜跖ハ柳下季の弟後章九ノ人天下を横行し諸侯を侵す人の牛馬かすめ人の婦女をとる多し爾の親を忘れ父母兄弟をかへりみず

すべて泊うおとなるべき而猛きこころあるもの多しあるいはこれむべきのこゝろなり

蚊蚋帳中の蚊蚋をやゝに辟をもてれば此は辟をきく時ハ我身ハ弊

こゝろ〳〵ふるこゝろよ

ゆや涼むこゝろの母も蚊の咬む

一カ所集おのづから今はうらむるかうらむ甚るの蚊もまたうらん

紀右曰人始生嬰子(エイシ)といふ 胞(ヘナ)の前を嬰といふ兒を嬰ある

抱く兒を乳養する母を嬰といふ

避蚊 維

こゝろ〳〵いけるものの心をんはあるべくこゝに母の息を青雲天上の

ゆり蚊のなを声を貴人の耳上るとある心の母の耳はいゝゝ大鋸

屑ふすべて線を入て紙帳の中一首の俳言こゝろ〳〵さへ

こゝハ大ゆう笑ひて大ゆう大鋸屑さゝゝゝ又ハ

蚊はゝゝ大ゆう大鋸屑さゝゝゝ又ハ

唐の蚊や詩人をくるひて蚊の形唐の蚊

義人の帳をこゝろよてやせ柳こゝ似ゝ

唐の蚊やつゝる枯ゝる 藁一日草 雲雪

あり川ゝゝ蚊の声ゝ軒の雨 法德

蚊の声の高ゝ蚊の高ゝ 風洗

魚の骨 大鮒ゝくさき蚊をうれ 孤屋

くゝゝの牛ゝゝ義蚊ゝゝ 雅風

蚊の声ゝ長一重 大柳

愛ゝゝの蚊をよひ川辺 青女

赤ゝ蚊ゝ蚊ゝ 桃蚊 大草

血をゝゝ蚊ゝ蚊の蚊さ 芸角

蚊や夫ゝ 橙は

橙 代ゝゝて正月の茶果ゝ一名蚊ブス 蚊ゝ人の下男ゝ

さいくの序を 殺せしてよく好む遊く

鉢扣ノ辞

去来

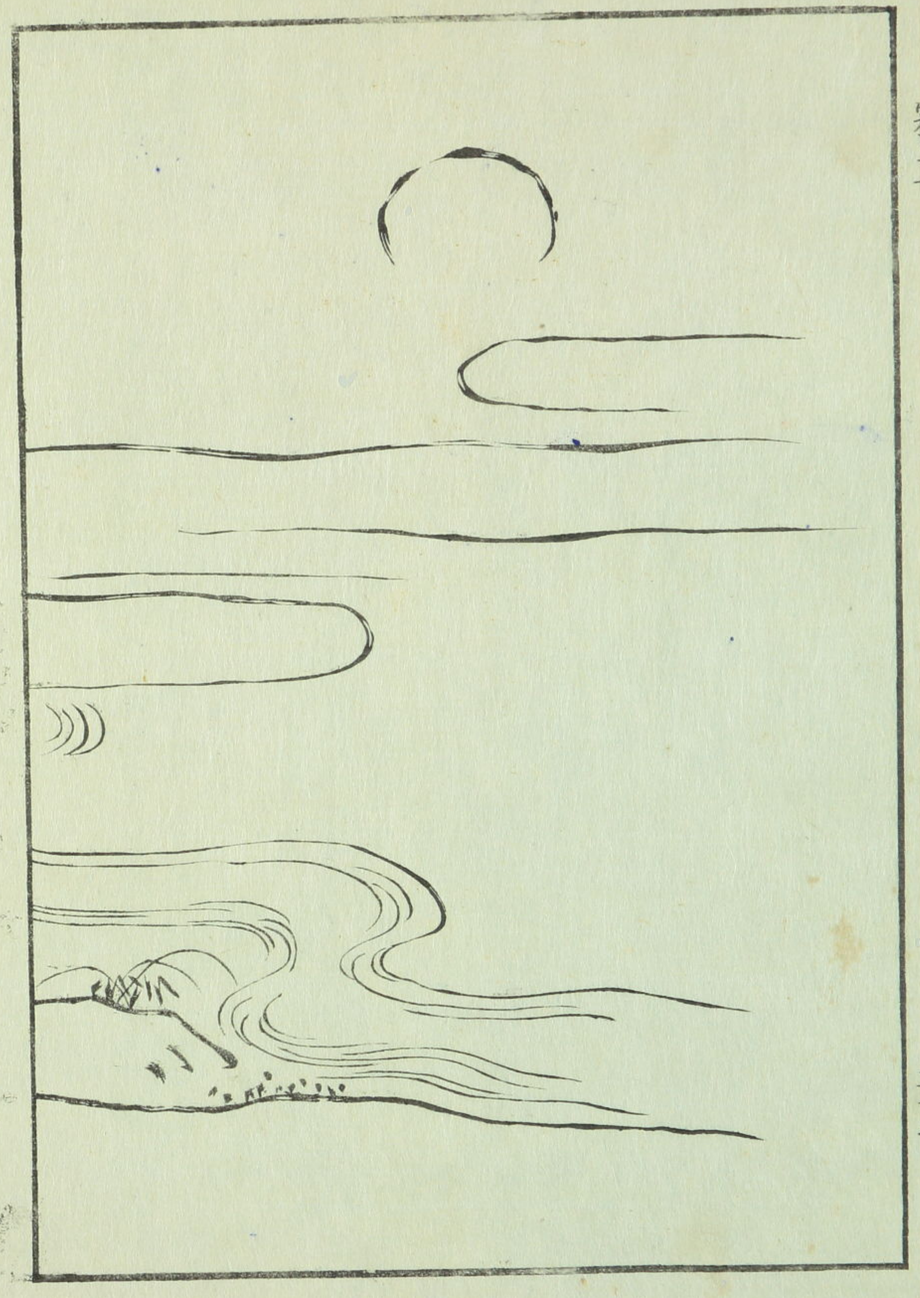
師走も二十四日冬もかぎりなれば鉢たゝきもやむと例の翁のわざわざまゐりける
今宵は風もさえしく雨も月もなくてとかく来らずいかに待侘ひのひな
んといふほどおかしくて 箏をさへ取出せむ鉢扣と庚吹の合すべき
る其声如也大宅を出るとのめしめがね悟あかれつるふりしく例くくる
あれ彼が修行は瓢をうち鉦打なきに念仏つれてはらひかけ合
てる誠に其唱歌に空也の化なりけらし寒の中と春秋の彼岸に昼夜は
都の外七所の三昧をめぐりぬ無縁の亡霊のなきとむらふハいかの御寿なり我家
をつとむといへり常は杖のさきに茶筅をさし大路小路に出て商ふ業なりハ
りめぐらとき無何もしなハなからぬ附ほ鉢叩と曲羅はかけさせたるあらひ
におきもやきなきりあるは四方にかゝげ法師ならぬ姿の衣をかけふたと夫
も星に深くてあられお前ハ前黄によき羽うちちらへある紋をつけて着なれて
月雪にあらず喜ぶ無き数人を与へ侍るさればハ甚前法師の考の御をとゝく拝さ

めでたしと聞けるをひとつやなくさりんおもけて拝さんとおかへりゆくなる
しるや明てさとのもひる 修雲の霧のかゝるひとる声して出来りけるに老肉
れまでよけき ものかなしちるあはみおくれてひとり今宵やならめん夜の
畏嘯の墓もめぐるか鉢叩と申すべのひるかはせ暁のるりててそ

作りける

正月八日鉢叩出初 十一月十三日より鉢扣出る中十八日の夜洛中洛外
の火葬場をめぐり瓢簞を叩き高声に念仏和讃を唱ふ昔ハ鉢を
叩きけるとかや十二月廿八日鉢叩法願 空也上人は延喜帝第二の皇子
なりしが塵外の志ありをそくもみとしを出家し給ふ玉樓金殿を立出て山野
歎さの奥に山居し給ふ鹿おほく来りて宿居を守りけるに上人是をあはれ
み給ふ一頭鹿来らんとする此平定盛といふ者の狩猟して鹿を捕来りけれハ山にかく
射とりけりとて上人大きに悲しみ給ひ其鹿を乞請て皮を裘とし角を杖の頭に
すゑて常に携へ給ふ定盛は上人の法徳に随ひし弟子となり教化に任せ妻子
を具し有髪俗体にて衣を着し衣は天台衣なり瓢を叩きて此作の
和讃をとなへ王中を拂く洛中をめぐりあるき浄土往生の因をすゝむ

玉井貞流画



すなはち之より定盛法師に示しける歌

山河の末に流るゝ杓売の身を捨てこそ浮む瀬もあれ

紫雲山極楽院光勝寺空也堂と号す念仏宗にして本堂ハ空也上人自作乃像を本尊とす脇士ハ地蔵毘沙門也方丈の脇檀に坐像阿弥陀仏行基の作又空也の像あり定盛法師香炉の灰を以て作る南櫃上にハ定盛法師の像あり今空也堂の内八軒あり定盛法師の苗裔なり　徳正庵　金光庵

寿松庵　東坊　正徳庵　利清庵　南坊　西巌坊

極楽ははるけきほどときゝしかどつとめていたる所なりけり　空也上人

挙白集　はちたゝき　長嘯子

いつよりかこゑぬきさなりひさごの笠持仏の具なるべくおのづから茶湯の水さしともなり又花をいけてものをもる一物三用に足る蓋のうちよりもやどる人もあり空也の遺弟といふなるよりて此よの銭鉢叩と衣つくいつよみなよすんハさむき霜枝の明くさ行るまゝあはれんのどかにち錫をすゞる彼が声にて哀をもよくめさそへてふとすつけるハ卯の花のかけるかゝる心地し

はちたゝき暁がたの一声ハ冬の夜さへもなく郭公

同集　心戒

瓢のつくかゝる物ありけるを昔の聖ハかくハあらじと笑ひけるやられやすきさまハ角親になりけんといひて則心戒といふ名をつけゝるおのれつくゞ入のあまりかくなりける世捨人これに一首をよみ出せる

夕顔よなりけるぞさがれ上人の佛のみやおもはるゝかな

鉢叩歌　晋其角

鉢たゝき暁がたの一声に　そら音かなしく　きつかれと

花に志の魚　死業のなぜ　雪や霰を　探さむらん

おりいろや汁　楊　たゝき　春のよめくる　つなかぬ

世をおもはけハ　しのゝ竹　気みの方なる　はのりなり

七十ちまて　稀なりと　やつて道心　捨てられ

酒にかくさん　楊くゝき　あしらふ人の　楊叩きやる

咲て死ぬ身乃暁や　樽くゝき

其身の艶詞はちたゝき唱歌

梅の花髣髴（ほのか）其俤よりむすぶちりはいさくら咲花の菩提の形くを
形くは此身八雲水の世を墨染の色くに　ナムアミダブツ
池の蓮の世を蔑（ないがしろ）に著て三河の吉田の居うとあこうまよ
ひくはさはくの情る衣くれん　ナムアミダブツ
月のくひくりむかく点人のなくるの種蒜　ナムアミダブツ
霜のくくよ音をくくこうふなるゆく先ちなるきぬのつれくて
かりる栗の花めくあ〜くさにひるまるとよいさくるの　ナムアミダブツ
山暁の一声よそのあはさくるるくはるるくれくさにいさやむ
ゆメ人くをあくくきにくなるくちくくよ

木下若狭守勝俊八金吾中納言秀秋の舎兄なる後弾正東山
霊山よ蟄〜和歌をたのむ長嘯子の天哉公羽る紛れる
答白集　山家記

小坂山の麓よ蘭若あり勝持寺とかける道風額あさやちなる
方丈のあよ西行の桜といひつくる老木の梅あり桜のくれる桜
さすくよ春を忘れるる首ありて情深〜嘆むかし誰

すみ〜咲のそくるのさそはてる塚やあり那るハ我かをくるるおさあ
よとつふひ未のかくみるるものくやと花のあを枝つ本立ものるる大
きやうに雪ありけ嘆くくむおかけかさん世迎あ〜さなるかもの
あるくるるるるとちきくをくひくる物くるをくく下界
長嘯子　慶長五年六月十吾京
七十五歳職人歌合　延宝元年七月
もくく声人きけくをくを執筆の志はくめくる月のあ移あつ

朱やくく我あをつくく　鉾　叩　湖春
おりろやめくあ　ほるとちくき　曲翠
月雪や鉾　叩き名を甚く　越人
をくくく春さめハやくじくちくく　思角
嫁入の門をくをくく　ほちくくき　許六
幽霊よ水香せくくる　をちくくく　紹月
多を於よ下弦はくるる　鉾　和　氷花
をちくき居よの雪ををさけよ　工門

納豆きる音しはしまて鉢たゝき　翁

臘八や何とゝゝそ鉢たゝき　木導

頬白く狩あつきなり鉢叩　紫雫

刀奈美山引

頭巾を襟巻となしつゝあかむけせしは霜月十三日の夜なり其おもむきと
に空也上人の嵐雪か妹となりてせし枕隣に痂気となれるを遊さん翁
柿舎をとゝいひ入よりさきたき付る酒の燗となりたる懐をあたゝめしみ
しみあり四季の一脈に出て芭蕉翁の書を読し笑し嵯峨のそなたへ
の住庵へ飛鳥川をわたれは清瀧川のちりなき月をおもひ猿子の
詠評ぞ芝居の信徳めくつり落をは一句まてこそおもしろく頃治
のあはれにあるよせて人なる人情かなしくの転動のよき十人の酬和くい
ひしぬ人の墓地を立ち翁一人を眼ふし行状行の響の近完を語て附の
さるかなせんとするに志らるるに八ツの鐘耳ひそかにて鉢叩の声かはきなる
是を嵐雪か浅之て十銭をなけて千声のひさこをかゝさしむ

千鳥啼かもの川越えて鉢たゝき　其角

今おしむめおりたるしきちゝきまり　嵐雪

ひやうらんも何信ろてし鉢叩　桃隣

旅人乃能きあふし鉢たゝき　去来

さればこ堅固のつゝめ外と其跡を志らせる比は十四日の明かの工匠小杉く
諸侍り梅花をまもりて四郎によれは雪の飛花松を掃て羽おりに志めり
かけるき梅にかゝる田楽の匂ひになりて一盃にてすゝむる桃隣か顔色飲よ
青し嵐雪か奉納の日に十両すゝるを附くる返答するを森めて行かるるとか
くするうちにかはりの腰掛所のまへに都の名跡をもとめ昔の仙洞翁の和哉
の旅寝に有故汝の吟あり浪花居士もよりて信仰の一集を撰め立ありく
去来着到をかゝりもちてひとつ斗のあゆみまて発句まゐりへまさよりを得し
めくるおとかる出てよみによみて山の表を起しぬ往日嵐柿舎ゝてをおもひそ
かに翁を追向对の盃ありてつくへのかくあるとかきせのふかく心をもの目おもく お
ほめれは一るまにおもひ侍るよしを語して心かくむる筆をぬきんて
撰集の餘力とし越の砺波に屠陳を立月しく続柳の瓊をふるって
下知するまてとありへの

世の中うるはしくもてはやされしかども
鉢叩いうたてきせをあらせん男
もてはやされしかども　女ま出あるあらんと
迷ひの無常をもてはやされしかども
ひとりこんよ井戸よりいでくや狸の腹つゝみ
うち門の井戸よりいでくやもちたてき
根を返りかへりいう　鉢叩
めしつかはれるもの鉢叩
鉢叩　手鉢を持ちてうろ
彩色するうつくしきうつや鉢叩
もちてきき渡る人のきこえるあ
物もうつくしもちたてもうもう
其ものもあるんそもそもちてき
鉢叩出るもの故の笑ひ顔

西白
知波
其角
許六
為有
丈草
活圃
路草
馬莧
文潤
風国
去来

芝原空也の庵の傍の路ゝと大体建ていき
中さかりをあるひおて
月沈む空也の庵の庵よりかへるとう　風国
かゝる鉢の空也の庵の空ンの角　為有
白えの
弥兵衛と、ちゝとありんや鉢叩　蟻通
行雲作をはせあるて　誠　ちゝき　其角

一とせ都まをあの形をはるゝ暁とまつしひやうんの音
かゝひて西ふく訛ひるを酒の者ゝとはつきる當世の幕　こせ
見せむ鉢叩と長ゝる其のちはるゆへるゝ
ちゝしきゝ者ぬ暁のおもひ深　自白宗教行の信を起て彼う一
流の音声のゝものゝ仏すゝ者めきゝ八今めきゝる白作りみ
ゆゝうすゝをいゝのひさこを持て知恵を者ゝ白をゝりもむる
人の感をゝゝ

四季ノ辭

古今和歌ノ文章ニ謂フ四季者多シ矣假令安ハ用ヒ俳諧詞ニ為ル其情ハ和歌文章ニ不可異ル今此辭ハ全篇以ニ財宝之上ニ盡ス四時ノ情是詼諧也

行主ノ益翁々ハ元ノ益翁ハ子面影ノ生涯ニ於ケル

隠坊の鋤鍬休する時ハ一人ノ時の用ゆる行通ゆるやうにめる老

ゆの後ハ光陰をたしかに徑路をはきぬ五十年来すくるを一

杯の菊を切るもまく今五十年生むるハ田樂をかへるやうに

明長時方丈記　ゆく水の流れハ絶えずして本の水にあらず

うたかたハかつ消えかつ結びて久しくとどまる事なし

論語子罕篇ニ　子在ニ川上ニ曰逝者ハ如斯ノ不舍ニ晝夜ニ

子取婆ハ今ハ人ハ産家ハ世渡る者なり

隠坊ハ今の世ハ墓ハ墓ハ埋墓ハ墓ハ埋る者を

穴ほりとも言ふ墓ハ死ハ墓ハ墓ハ埋る者を

つゝ草ハ植つゝ草のつゝ草ハ植つゝ草のつゝ草ハ植つゝ

許亡

あ丘の根ゆく塚の数ハ墓をむかへつる　西行

雪のあけぬ先ハ墓ハ墓ハ墓ハ面影　程色

郵耶代醉篇ニ人死を逐る者あり井ハ八八四蛇足をやるて

まるまるのあるハ八八樹ハ則二鼠限をかむ者ハ遂ハ

古ハ墓を埋る葉ハ礼ハ弓をつぬきて弔ふ鳥獸の害

を助け驅る故ハ弔ハ矢をうつぬきて弔ふ今ハ

ちゝ一ハ世の事相をるにいつれのあれるさまなるハ

物語ハ花ちりハ時ハ花ちりハ

墨ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ墓ハ

墨相ハ佛家の詞を用ひて一ハ世のうりかけるかくのごとしひ

元轉女清少納言枕草子の作者なり

まつ春の門ハ賀の門ハ出物ハ八月歳暮ハ

物語金銀ハ

柄にて下万民のよく返千代万代を十かへりとあふぎ奉るなるをいふ也今金子の威
徳よりて大判を作て出仕し白銀を用甚よりて早下しるてそありけるとぞ
金子の名 舟印子 花印子 大仏判 新大判 武蔵判 駿河判 京小判
佐渡判 大仏判といふハ太閤の時後藤徳乗相極め極印の桐を徳
乗に作也大仏供養入用の為拵へたる故大仏判といふ文禄四年 江戸
駿河にて小判拵へ光次判と名付てかきしるし先を武蔵判と云
慶長五年右墨判に書しるしを極印に打して作りつけられし時一
歩判始まりて小判歩判ともに慶長金といふ也
銭を九文の穴ある銭にて青さし一貫文を以てしこき箸蝋燭一挺あり二
十五十の年玉返答お互ふにそめてさかり春宮川をこへ人々六月の
晦日にまとひ祝儀に用ゆるさかいて銭つなぎることといふ也
一目千足万足賜る右ハ小判小粒の金子を立させ今の如くお
年ハ金子を糊にて付るなりお年ハ金中へ千足万足などと書たる年也ある日もな
猶るに諸氏お祝儀を送る年の御落日に右の員数の書目を送る京都将軍
家の時代に礼となりかくの如し遠国の大名より公方へ献するに先使者

にて状を以てお祝儀を献してのちるる目を運送す数月過て京着するに
結を一足といふハ一足を二番（フタキ）にけ之ま女二人の衣装する故に一足といふ之
ま女二人おきるうふを一足のま女といふ也論語に返ま女返女といふ是なり
足ハ配也物を一對といふ那し足の字同し犬を一足二足といふいわれハ犬
追物の時河原者縄の内より犬をとらせハ騎る一矢犬を射るなり二騎
三騎追かけ射るといへるなまかるる矢を只一つなかつる一足なる犬一つなる
るる故に犬を一疋といふこころなる犬を一足二足とハいふへきものといへるなり
世俗の詞みくりすくて常の犬をも一足二足といふ故に廉かなき狸 猫
猫風小虫にいたる迄いひ習ハしける料足を十足二千足といふハ犬追物の
時河原者犬を百足なるてハ一貫文とり五十足故てる五百文なるなり
犬十疋千銭にあたる故に十銭を一疋といふ是犬追物より出る詞之
今金子大判小判小粒なるハ慶長の頃はやりて其音ハ高日本也凡物目
にみをきとアれハ心にまよしとおもひ心大きくなる目におしとアれハ心に
おしとおもひ心ちいさくなる今金子一あたとアれハおしとおもふ昔の人今の
一あたに当る銭をアれハ見しとおもひ百あ千あにいたる迄用意之多くよと

おくゝ吝嗇の情あり おとゝ吝嗇の情生ずる日のゝ通用の時代ゝ
人情たさるゝ故ゝ賤用巡行やとゝのにて世間貧ゝ人ゝ今ゝ通貨ゝて今
の人情ちさき故賤用巡行やゝゝ世ゝ貧ゝ十あの人ゝゝ八袖の内ゝも
かゝの千貫十あゝあゝ銭八座席の妨けゝゝて家ゝ大きゝ異人其人
ゝ為のゝ多ゝゝとて心の静動大小異ゝゝゝて心大なれ人情
賤を為するゝ故むゝ心おさ人ゝ情賤をあつむゝゝ故むゝ自然の勢ひ也

元方あゝの十二觀ゝ為の神ゝゝゝゝゝめゝゝ理ゝ元ゝ世の中を度くめく
みとゝれのゝ拾ゝ花のゝゝとかゝ其の原やゝゝゝゝ里の中道溝石やゝゝゝ
比ゝつゝ南の二階ゝてめて白き八甘色といひゝゝ南鐐の白き風情をなむ
すゝん柳連翹の黄色ゝ茱萸山吹のあゝゝゝ花かの大判の線をゝいやむゝ黄の
度ゝ衣ゝゝ八ゝ世今の同類ゝゝ一しきゝゝき二日の雨ゝゝ野外
明者ゝゝゝ日かけゝゝゝ南の陰ゝ坤ゝ雨ゝ沈む黄
のひ行ゝゝ日ゝ誰ゝゝすゝんとおゝつゝゝゝゝ熱太郎ゝ
後かゝゝを為ゝおしお乳めのとゝゝゝ迷ゝゝて深ゝとゝゝゝ
遠ゝ内ゝゝゝ後のゝゝ銭ゝゝ為ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝ者命いきゝゝ心地して食饗の苦ゝ銀ゝ陽氣の立まて拾ゝて行買ゝゝ八
ゝ為ゝ後ゝ兵ゝ小と斗ゝ初ゝゝ初年とかゝ銭報者の稱ゝ後ゝ簾の中
ゝゝ貫の銭ゝめてさせゝゝ拾ゝ銭ゝゝゝゝ雑ゝ八佛ゝゝいゝ
ゝゝ黄金の層を別ゝ閣浴檀金を最上とおゝく極楽ゝ八金銀を為
とゝいつゝの佛神ゝ詣てゝ銭箱のひきゝめてゝゝゝ

永樂銭一貫文ゝゝゝ鐚銭四貫文ゝゝ則當四銭也一貫文を金
一兩ゝ永樂銭ゝ明朝の代三十三年ゝゝゝゝ年日本應永十年
ゝゝゝ年八月三日唐船我朝ゝ来ゝ海又同年日本ゝ唐土ゝ貢物
を納ゝゝゝゝゝゝ永樂銭をつゝ来ゝゝ慶長迄き年迄実東ゝ永
樂鐚銭ゝ同ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ慶長十一丙午年迄三百九年ゝゝゝゝ其比東八ヶ国の大守ゝ家氏
東作ゝゝ八銭ゝ為ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
東ゝて、永樂一銭をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
市町ゝて永樂を用ゝゝ銭迄ゝ他ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ用ゝゝ故銭ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今天下一統の代なりて此二銭を是まりて永樂一銭のかゝるよ
銭四銭を銭をなりまりようあをあをひ万民あをを
以由 上ようやすなる銭一銭を目四一永樂銭と唐長十一年高礼を
建らるまより天下永樂銭すなる永樂 銭目まかげ 鑄物師
買屋家の通奥こゝとなる
銭を初穂といかなきさまを清和天皇の代貞観十三年鏡屋神宝
の銭を反し貞観永宝といふ銭を鑄させらるゝ鑄銭司 山城国葛
野郡の鑄銭司と名あり銭を奉りけれ八十一月十五日乙丑勅使を
諸社まつはする 新銭を奉る其告文
所二鑄作之早穂 二十文手左馬助 従五位下多治藤吉手
差使天今棒持天奉出賜トゝえこう是ようより銭をハ本とする俗
こゝぼー 瓢箪一枝 未木考
枝ハ花の元 食香素艶欲頃城 山巷是才梅是花也 菅公詩
南錄ら録の最上なるをつふ唐長記ら宗慶ら寿るの毛色雪の如くなるを
白錄と名つけ今衣るを号の表面ら下て揚貴妃ら寿ら如ら

童をさして也 同源擅金とつ宣徳の代つくる黄唐金なり小
仏子供をつくりて多ふ
もの皆黄唐金なりつくるなる其黄金なるべし
伊勢講の銀かりめしを田るこの邪 新六
弁のこゝやそこけ隠の恵 大郎
題黄金 目ゝるる一万牧を花の春 其角
揚州崔 漢ゝ近都の空や 連と金
世の中の人の心花ゝゝあ蒼ハ日くゝ長して田舎の人銀らすへて都の
あくゝるる東西の遊ひ南北の嶋を丈て銭る人と一足もすみかゝ
櫛ら四方山ら雲れて書雲を花の名前ハ賀六田の軒端ゆ重の雲
を見つゝん武山ら弥勒の代つくるへき金とやむしより世の人の西ふと
をつなりやゝ弥生ゝくして時るの来へき卯月の雲あくりゝる仏星の
姫箔の雪ら仏を卯の花とくらやみん錫も鉛ゝくるゝ白銀の層ゝて
牡丹の花のゆきハさゝゝ世よ稀る紅とて長安の家家ら水てあをハ是
ゝ魂をゝゝさる其西ふきるら小列を植て詠むるゝ雲青ら

東流堂

[illegible]ちよりすゝつて水鶏らよりすゝ池鯉鮒宿のる市るて一歩ひろ三つをといひ
[illegible]ちりるに買牛買の調とて五つぶ十つぶとすゝかゝ伯樂さ錢金をもあるる
あつまりゝる松女郎良のあるひ賽ろう擂鉢一のよう売すて度ゝ山をのあるす
まるを[illegible]里ある地ゝるゝ〜そやし祭喰ひ祭おつき業る麻かるころ
[illegible]山をうくかゝ種ゝるとる跡の田植さくおゝて例の五月雨ゝ
つゝきゝまて市ゆ入る附矢部堤ゝきゝて道筋かゝう大井川まて流田金
谷る陣を張る大名小名いくかゝ程世京の川くいゝ年あんゝ心ゆゝ此時
例の一歩小別のゝゝきゝそそ目さもむるさなゝ梅雨時の六月空さて雲
る雲をくゝう植田沸ゝう天地ゝ揮の声ゝ響ひゝゝ一日のあつさゝゝて千
ゝせをゝるおゝひゝるに十九土用とゝや京男舎熱病ゝ雨ゝゝ卦家ゝゝ
ゝくやゝそやゝて水薬師の泉も甚切ぬゝく驗者のいのりゝるゝるあゝ紫雲
とかゝ世ゝ良薬ゝて立ゝ醒ゝゝゝそゝ黄金ゝ鍋ゝて黄金をせくゝる物ゝゝ

[illegible]ゝ八[illegible]の賊ゝあゝ賽ゝゝ[illegible]ちゝゝ一ゝ解ゝ及ゝゝ
賽のちゝみゝそ正月船玉祭船ゝ初ゝ賽をゝゝゝゝ故賽ゝあゝ
上〜一をゝゝ一天日和ゝきゝゝゝと祝〜さゝゝゝゝゝゝる方ゝ六地蔵

直ゝて水上おゝゝゝゝんゝ
三ゝゝ寺みゝいゝゝゝ四ゝゝ長ゝ仕合ゝゝゝ形ゝゝ
大井川の東岸に大猪大明神の社ゝ此川の出流ゝて遠州の海潮ゝ
ゝき入海ゝ霊石ゝ弱の形ゝ似ゝゝ干潟ゝゝゝゝ
三足ゝゝ海辺の泥ゝゝゝ弱の数ゝて石足ゝ海底ゝ流ゝゝゝゝゝ
ゝ大井の河伯の霊ゝゝ此海上東海道一の大難ゝゝ此海底を弱形ゝ
上ゝゝゝ此難を往来する和の中ゝ笠物及ひ画の顔ゝゝゝ弱ゝ
形の物ゝこのすゝゝゝ其形ゝ怪異ゝて此海ゝゝゝゝゝゝゝ人
形ゝゝ高形ゝつむ弱の内ゝ骨牌ゝゝゝゝ雅れ四十八枚ゝる
一枚ゝのゝゝ別ゝ弱ゝゝて京ゝゝゝ陸地ゝ東都ゝ送ゝゝ
ゝゝみゝゝの雲ゝ此おゝゝ 大井川 百
ゝる土ゝ考ゝゝ一海ゝゝ大井川
考ゝゝゝゝ
今特の弱ゝ利をゝゝ老の春 舒六

水薬師の泉 京都西七條ゝあゝ

六月土用ニ入れめくりを借り初中後三度借りしめくりを見るに
白き紙に書きぬるこの茶をの茶を胡氏なる京都の伊新
名土用にめくりを食すれば疫病をやまひなくつゝしみなひなく
常雲ヶ金をせんと思ひよく熱をさまされ文出ニ自在あり
やく宝風雲の多むけるを立てめ芋の葉ゝ つゝこゝら金氣世ゝ おこるハ
ヨて星合の前るゝ物を迎つゝこゝ草墓市花まゝ丁銀いおゝ出
ゝゝゝゝ奥の世の中かつゝ迎礼のゝゝ金の直ゝ法を迎礼ゝ
別ゝゝゝ家ゝ遠史陵寺ゝ縁ゝこゝ且那寺のゝ伊棚銀
ゝゝゝ物貧せ酒のゝ世やゝかけ合ゝ一銀ゝゝ生男魂養ゝ入ゝ世てゝ
ゝゝゝ生男魂養ゝ入ゝ世てゝ
なゝ銀伊ゝ十八廿四日ゝ かきゝゝ定め世界の金銀ゝ決附ゝ里ゝ
ゝゝゝ一銀ゝゝ自分ゝ世ゝ
ゝゝゝ

すんある人家を貧家智をゝゝゝ貧楽の道楽人つゝる前伊諸
伊ゝゝゝ世ゝ松伊象浮の旅をゝゝゝ秋ゝゝゝ嫌ゝ更料
の月ゝ金ゝ三長袋ゝ分算をゝゝみ迎ゝ書ゝの出ゝを越ゝて尾花のゝゝ
稼ゝゝ加伊伊の下の草枕一夜二夜ゝゝ長逗留ゝ館ゝゝ
ゝゝ先の油の伊ゝゝゝゝゝゝゝゝ

伊京ゝ京西条宝よあり拾ゝ所ゝ寛永年中肥前国伊京一
揆発動の附用ゝ出ゝゝゝゝゝゝゝゝ拾女の名京大坂ゝ
大天神小天神引船白人ゝゝ近ゝゝの名ゝ秋田ゝ伊ゝ奈良ハけんこ
酒田ゝ柄杓ゝ杓ゝゝゝゝ行伊出雲崎佐渡ゝゝゝ分石の巻南部の
辺ゝゝゝ階ゝゝゝ鹿伊ゝ如意ゝ伊神寄ゝあこひめゝゝ
大観音ゝゝゝゝゝゝゝゝ

伊京を流ゝて ゝゝゝ

被ハ裾ノ垢離ヲ川降のつまり物を買てあゝゝを出ゝを掛ゝゝゝ
被除の意よあゝゝゝゝゝゝゝゝ

かなまぜ銭四文をもて諸宗通る点をうけしめたまふよし流行して
寺吟八景の手をうめこまれ点を短冊をうくせいはすくるく点取
のうたんとて十四サの天と定られうるうるあるうる盛るるくを
貞代
天台を四門とこそうるなつると二十五文をさるること
寺吟かて
山王の二十一社を四門をうる二十五文を一とな 鹿山
此面にあれるいるるくるく百貫 此面にあれるいるるくるくるく

ろのきやまく秋宅のみちと銭中　、

千利休ハ太閤秤ゝ銭ハ第一目四〇ハ目四〇ハ目四〇ハ

勅撰乃八雲こゝあるんめとまた　新六

中院通茂卿七十賀記に讀師　發声　講頌とあり講頌とつふハ講ゆのしるし歟　音曲の人あるひハ詠吟をたつけくる事者きやひかりて、撰歌の歌をあかに詠吟するんらんを講頌とつふはゝめ讀ゆひ通うよみあけ果て發声はゝめの五文字をこゝに出るまゝ付て講ゆくゝふ講ゆよ付て講頌同音よゝゝあるう

紫式部集　山本紀ヶ新左衛門のこゝろ　ひとうさゝ他者のめつらしくあかゝゝるいひ出ゝゝん秀逸をとつゝ一文字なりとつふゝるあめくぬすみおゝんへゝゝゝ式道の死羅ゝる一ゝゝて因幡の軍をや京極黄門のかきをゝれ一筆の縁誰うなみせんあるのこゝるむ一ゝ世の人の歌よむゝ偽ゝうおて上るの名あり西行歌ゝあるゆゝ徒行一めゝう遥の海山を隔てゝ見ゆゝ　ゆゝ　ゆゝ　

かなまじり連歌なり

古服今服とつかまつるあり古へのまみこといふハ古書を常よみなれ
て古代の風儀をよく見認るを服をいふ之今の服といふハ今の世の風
儀をのゝ見なれて古代の風儀をまるで違ふ服をいふなり古の服をもつ
て今の世をみるハ今のつゝめしつゝ異なるの所ゝうよりまた今の服を
以て古代のまとみるハ今の風儀の所ゝ故よりくるハ故よりくるハ
解しかゝ毎ゝ古書ある金百あるハ煉金にて秤目百兩のまなるを今の
服を以てみるハ小判百のまとおもふ人古書にまとあるハ尾張
よりある物にて長さ八丈のまある今の服をもちてみるハ丈尺のある
とまなみつゝめ一疋とある八丈縞之今の服にてみるハ糸くるの本数にて
又古へ刀とあるハ腰刀五寸より八寸迄のつゝのなきものをまを今の服に
みるハ打刀と見る寸刀を今の世より小さく大小にてみる長さのまを打刀一
名ハカタナとつゝ上下とつゝ行にて上下一具とする服を上下といふ

但欲二愚者悦一不恩賢者嗤

風俗文選 犬註解 巻之壹終

尊経閣文庫印
御目録校